

図書館だより

1991.10.5

第13巻3号

通巻119号

Bulletin of the Hokkai Gakuen University Library



十月

國田祐作

空のすみゆき

鳥のとび

山の柿の実

野の垂り穂

(中野重治「十月」より)

有田の陶工柿右エ門が、柿の色を絵付けに生かそうと苦心した話が、戦前の小学校の教科書に載っていた。子供の私たちは、絵本以外に実物の柿の木を知らなかったから、夕日にあかあかと照り映える柿の実を想像の中で描くしかなかった。

海を越えてはじめて見た柿の実に、私はほとんどウロたえた。それは絵本の絵そのものであり、

芝居の書き割りと寸分違わぬものだった。

秋の深まりを柿の色づきで表わすのが本州だとすれば、私たちはナナカマドをもってするだろう。

しかし、札幌で柿の木を見られぬか、といえ、そうでもない。げんに、学校から一丁ほど先に、柿の木がことしは成り年らしく実をどっさりつけているのを見ることができる。

庭のあるじに聞くと、先代が福島から四十年前に運んだ二本の苗木が育ったのだという。別の一本は山の方に育っているそうだ。

冒頭の詩は「それにもまして あさあさの つめたき霧に 肌ふれよ ほほ むね せなか わきまでも」と続く。この詩人は若い時からこのように朝の乾布まきつをして、ときに弱る心をはねのけて来たのだった。

(くにた ゆうさく 教養部教授)

アメリカ社会における 大学と大学図書館

小池 直子

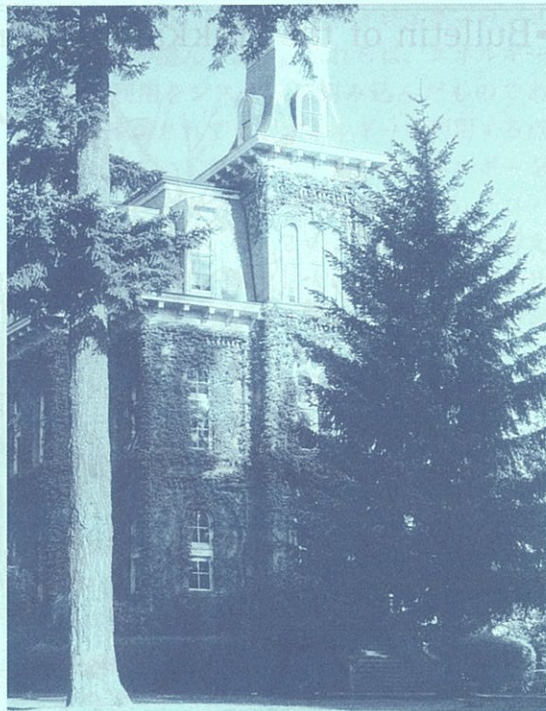
プトレマイオスが、アレクサンドリアに世界最古の図書館を創設したとき、その役割は、ちょうど、今の大学と図書館とを結びつけたようなものでした。そこでは、世界中から学者と文献が一同に会し、文献の研究と、文献のパピルスへの複写と、誤りの訂正がなされたとされています。

知識の宝庫と研究とが一体化したそのあり方は、現在の大学と大学図書館の関係の原型をみる思いがします。また、良しも悪しきも、もう一つの研型をそこに形作りました。すなわち、それは、現在の大学が象牙の塔とみなされる側面です。アレクサンドリアの図書館は、その相対的知的水準の高さから、それを取り巻く社会から遊離し、(ちょうど中世の修道院が中世社会から離れて社会の精神的バックボーンの役割を果たしたように) 独り、社会の知的バックボーンたる原型をつくりあげてしまいました。

確かに、現在社会における、大学と大学図書館のあり方は、アレクサンドリアの図書館とはおもむきを異にするかもしれませんが、しかし、ある意味で、研究と知的情報が一体化し、また、それらが象牙の塔とみなされるように、社会から閉ざされた一面を持ちながら社会の知的バックボーンをなすことも否定できません。

アメリカ社会で、(大学図書館を含む)大学のあり方は、そのなかにあって、日欧のそれとは驚くほど異なっています。確かに、アレクサンドリアの図書館にあるように、研究と知的情報が一体化した存在であることには変わりありません。しかし、それと同時に、それらは社会に対し、常に、開かれた存在でもあります。変わって、今日、アメリカ社会で、大学組織全般に求められているのは、唯一、社会への実践的貢献だけであるかのようです。

これには、明確な理由があります。それは、アメリカ社会が、機能分化を基礎とする社会のためです。この社会では、各機関ないし各個人は、自己の得意とする機能部分で、自己の能力を発揮す



オレゴン大学

ることで社会に貢献し、そのことにより社会から存在価値というパスポートを得ることを特徴としています。

大学に関していえば、一方では、新しい専門的知識および技術の開拓がはかられ、他方では、それらの知識・技術の伝授がはかられます。そして、大学はそのことで自己の存在価値を維持し、また、そこで学ぶ各個人は、伝授された知識・技術を活用することで社会からパスポートをえるというものです。

アメリカの大学図書館は、このようなアメリカ的機能社会にあって、同じように機能分担を果たします。すなわち、大学図書館は、研究および教育に必要な知的情報を提供する、一つの機関として存在しています。大学図書館の役割は、各研究機関で畜積された過去および現在の知的情報を、蔵書および資料のかたちで収集し、それらを学ば

うとする研究者、学生に、知的情報としていかに的確に、いかに迅速に提供するかを主な仕事としています。この意味で、大学図書館は、いわば、過去および現在の研究者と将来の研究者を、図書情報という架け橋で結ぶ重要な機関ということができそうです。

このような機能を持つ図書館を運営することは、一見、容易であるかのように思われます。ところが、大学等の研究関連図書館の運営は、相当に困難なことが知られています。それは、他ならぬ研究と名のつく情報を、これらの図書館が扱っているからです。ここで困難という意味は、その知的情報の内容を理解することが甚だ難しいということです。情報内容が理解できなければ、収集も分類も、さらには利用者への的確な提供も疑わしいものとなります。アメリカの大学図書館はこの問題を、専門のライブラリアン制度で解決しようとしています。

アメリカでは、ライブラリアンのための大学院課程があり、そこでは、ライブラリアンは、一般的な図書館基礎科学の訓練を受けたのち、(医学、法学、ビジネス等の) 専門図書館、大学図書館、公共図書館のどのコースかを選択する制度になっています。この後さらに、化学、文学、数学等の各専門領域で学位をとることを要求されています。このようにライブラリアンを専門分化することで、困難な専門情報の処理に対処しようとしています。

大学図書館でのライブラリアンの役割は、図書の選別と収集された図書を利用者に提供することであることには変わりません。しかし、ライブラリアンの役割は後者の情報提供に重点がおかれています。確かに、情報提供の方法として、カードによる方法が一般的です。しかし、ライブラリアンはこれらの方法より、よりきめの細かい情報提供を行うことができます。例えば、「18世紀のアメリカ児童文学とイギリス移民の影響」というタイトルでレポートを書くことを要求された学生に対し、カードはそれほど威力を発揮しません。このとき、ライブラリアンの助けが最もパワフルなものとなります。特に、ビブリオグラファー、レファレンス・ライブラリアンは、学生に対し18世紀の

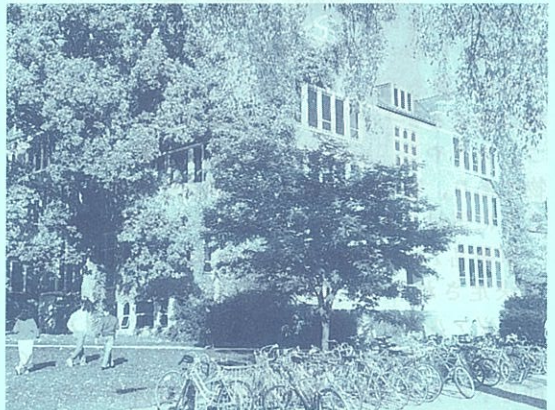
児童文学の的確な資料およびイギリス移民の持ち込んだ文化、習慣の情報を指摘できるでしょう。

ただし、このような機能が十分果されるには、やはり、専門の領域を持ったライブラリアンが一図書館に数十人単位でいることが必要でしょう。例えば、私の通った、オレゴン大学では学生数14,917人に対して、専門のライブラリアン42人、非専門職員(タイピスト等)83人、学生アシスタント42人の総計167人、また、カリフォルニア州立大学サンノゼ校では学生数18,594人に対し、専門ライブラリアン35人、非専門職員53人、さらには学生アシスタント150人の総計238人という大所帯で利用者と図書情報の橋渡しに懸命です。

最後に、コンピュータの導入による端末からの情報提供が一般的になりつつある今日でも、データの検索等の手助けにはライブラリアンの経験が大きく役立つことは確かです。

このように情報の保管と情報の提供という機能を果たす図書館にあって、ライブラリアンに課された使命は重大であるように思われます。わが国にあって、このようなライブラリアンの養成が待たれるところです。

(教養部教授 こいけ なおこ)



Mid-Westの大学

神秘学入門——想像力を象徴する眼——

■三浦 京子

20世紀の英国人作家D. H. ロレンスの名を聞けば、誰しも『息子と恋人』『恋する女』『虹』『チャタレー夫人の恋人』といった作品名を思い浮べるであろう。芸術的観点から駄作の刻印を押された『翼ある蛇』(The Plumed Serpent)に傾倒する者は、さほど多くはあるまい。まして、作中に出現する「ケツァルコアトル象徴」なる奇妙な象徴に興味を覚え、舞台となったメキシコ目指して探究の旅に出発するに及んでは、物好きと誹られるかもしれない。

ケツァルコアトル象徴は、サクラ湖畔に建立されたキリスト教会の尖塔に十字架に代って聳える金属性の作り物であるが、“Dark Eye”(暗い眼)とも呼ばれるように、黒い眼のように見える。太陽かと思ふほどに燦然と黄金色の光を放つ二重の円環の内側に、翼を上げた一羽の黒い鳥が五つの接点によって接合されていて、あたかも、自らの尾を銜えるウロボロス状の蛇と鷲を想起させる。

未熟な筆者は、劣かにもこのような象徴が実在すると確信したのだが、散在する遺跡を隈無く駆け巡れども、発見しえたのは、至る所で蝮局を巻いた、あるいは、階段状ピラミッドの中腹に臥して大きな口を開けた「羽毛ある蛇」の姿ばかりであった。しかも、「羽毛ある」を意味する“plumed”が何故「翼ある」と訳されたのかと考えるに至り、謎は深まる一方であった。焦燥と失意に駆られつつ、ようやく、それがロレンスの想像力による産物であり、賢明な訳者はその事実を理解していたことに気付くまで、さらに幾許かの時間が流れた。

原書名The Plumed Serpentは、出版社の意向で決定されたが、ロレンス自身はQuetzalcoatl(『ケツァルコアトル』)を希望した。ケツァルコアトルは、アステカ神話によれば、アステカ王国の前身トルテカ王国の農耕を司った守護神であったが、戦の神ウィチロポチトリを信奉する一派に制圧されて、10世紀末にサラマンダー(火蛇)に乗って東方に去ったと伝えられる。二神の対立は、天と地の属性を体現する鷲(ウィチロポチトリ)と蛇(ケツァルコアトル)の闘争としてアステカの宇宙創成神話にも語り継がれている。また、メキシコのコイン(図1)の多くが、その片面に、蛇

を捕えた鷲が石の上に生えたサボテンに止まっている図柄が描かれているのは、アステカの神官の夢に現われて、そのような地に都を築くよう予言したと言われる守護神ウィチロポチトリの優位性を明示していると考えられよう。

ロレンスによって復活し新たな人格を付寄せられたケツァルコアトルが“morning star”(明けの明星)と称されているのは、朝と夜を媒介するばかりではなく、光と闇、男性と女性、天と地といったかつて宇宙の始めより無限に分化し続けてきた対立原理を統合する試みを暗示している。即ち、ロレンスは、『チャタレー夫人の恋人』において、「現代は、キリスト教の墮落によって荒廃した悲劇の時代である」と憂える一方で、当作品では、生命力に満ちた楽園回復の夢が、鷲と蛇の両属性を備えた異教の救世主(ケツァルコアトル)に導かれて人類が創造以前の原初の未分化の状態に回帰することによって実現可能であるとする積極的な打開策を提起したのである。否、可能性を信じたかったと言い換えたほうが正確であろう。邦名『翼ある蛇』は、始めは翼がなく未完成であった鳥が翼を持ち飛翔力を授かることの意義を作品のテーマと考えるロレンスの心情を反映するよう、訳者が意図的に改題したものと思われる。

さて、鳥の代りに人間を円内に配置するならば、ケツァルコアトル象徴は、ロバート・フラッドの主著『両宇宙誌』の扉絵に描かれていると言われるヴィトルヴィウスの人体比例図(図2)に合致するであろう。これは、円環が表わす大宇宙と、人間が体現する小宇宙との照応関係を表象する図である。さらに、同様の関係は、二つの三角形を組み合わせてできるソロモンの星(図3)によっても示される。接線を水面に例えるならば、そこには、水面上に実在する三角形の影が鏡に映るがごとく描き出される。二つの宇宙は、光と闇、あるいは、善と悪の対立をも具現する。これは、分離した主体と客体、即ち、一なる神と神からの流出の結果誕生した現象界を表わしているとも考えられる。そもそも、原初的人間は、本来自我意識など持たないため、自・他、主・客を区別する必要もなく、いわば述語動詞の世界に居住し、神と自然と人間は未分化であったが、科学的認識方法

の誕生によって、主体と客体、つまり、「見つめる自分」と「見られる自分」（行為している自分）への自己分裂を強要されたのである。見えざる神を見、接神を図る試みは、アダムとイブの楽園喪失以来、原罪を負わされた人類普遍の願望であった。しかし、己れの悪・影の部分を見つめることによって主・客を合体し一なる絶対神を人間である自身の内部に発現できると考えたのは、錬金術道士のみではあるまいか。

ケツアルコアトル象徴が具体的には鍛冶屋の手で作られた事実からも、錬金術作業との関連性は顕著である。錬金術とは、C. G. ユングによれば、鉛のような卑金属を黄金に変える術であるとともに、物質の化学変化過程にこれに平行して進行する観察者の心の変容過程を投影する作業でもある。科学的合理主義時代における心は、意識に同一化し、中心の自我によって統括される。これに対し、錬金術は、潜在する無意識諸内容を投影によって顕在化し積極的に対峙して、映し出された諸対立を調和に導き、意識と無意識の融合を図る。錬金術道士は、分裂以前の統合体としての「自己」(Self)を確立することが可能であると信じると同時に、心眼を開き見えざる神の像を結ぶ想像行為を体験することにもなると考えたのである。すなわち、錬金術は、キリスト教の神による救済なくては死に直面せざるをえない機械文明を築き上げたりアリズム的・形而上学的な認識方法を拒否し、想像力に基づく象徴主義的・反形而上学的な新しい認識方法である。

「眼」は、「見る（認識する）主体」と「見られる（認識される）客体」とを区別するため科学的認識方法を示唆するが、見つめ合う恋人達の眼であれば、その瞳には縮小された相手の分身が映し出され、主体と客体、実体と影の区別を消滅させ二を一にすることにより、錬金術的認識が実現する。眼の形をしたケツアルコアトル象徴とそれを見上げる信徒の眼の間には、このような関係が存在していたと考えられよう。さらに、エドガー・アラン・ポーの世界を絵に表現するためにオディロン・ルドンが執拗に眼を描き続けた（図4）のも、あるいは、球面鏡に映った自画像とそれに見入るM. C. エッシャー自身の眼とがあたかも合せ鏡のように際限なく反射を繰り返すのも、両画家に潜在する錬金術的認識方法を暗示しているように思われる。

（みうら きょうこ 教養部講師）



図-1 鷲と蛇の図



図-2 フラッドのヴィトルヴィウスの比例図

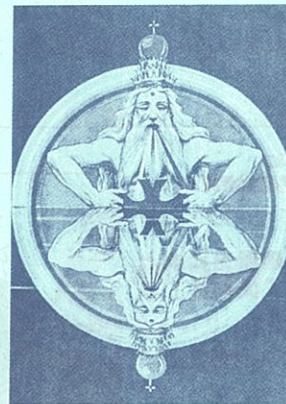


図-3 ソロモンの星

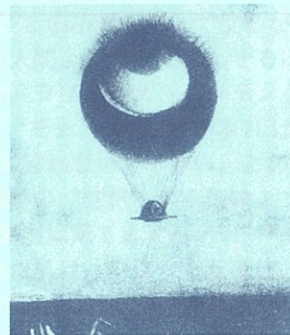


図-4 ルドンの作品

展示会のお知らせ

■展示中

期 間 平成3年7月3日～10月末日

場 所 北海学園大学附属図書館 1F 自由閲覧室

テーマ 「幕末鎖国下の海外情報と蝦夷地探検
〈漂流民〉大黒屋光太夫と松浦武四郎展」
～本学図書館北駕文庫所蔵古文書よ
り～ (図書館展示きかくNo.14)

- ①松浦武四郎他蝦夷地探検家たちの著者
- ②幕末・鎖国下の主要な情報源～漂流民・漂流民記と大黒屋光太夫関係文書
- ③海外事情書

※展示目録 (B5 ; 7 P.) 配布中



■展示予定

期 間 平成3年11月～4年2月

テーマ 「北海道・マサチューセッツ州姉妹提携
記念 北・マ交流史展」

(図書館展示きかくNo.15)

Exhibition of the literatures concerning the history of mutual communication between the State of Massachusetts and the Prefecture of Hokkaido.

Contained in the library of the Hokkaido Gakuen Univ.

Pt.1 北海道・マサチューセッツ州交流史

History of mutual communication between Massachusetts and Hokkaido.

Pt.2 日米関係史

History of mutual communication between U. S. and Japan.

Pt.3 アメリカ研究・ガイドブック

American study & Guide Books.

Pt.4 マサチューセッツ州出身著名人の著作とハーバード大学刊行物

Publication of prominent person & Harvard Univ.

Pt.5 北海道と日本に関する英文書誌

Bibliography of Hokkaido & Japan.

Pt.6 北海道・日本に関する本 (英文)

Books of Japan (English edition).

※展示目録 (B5 ; 5 P.) 配布予定

Schedule to distribute the exhibition list (English edition).

気楽に読もう

「ライ麦畑でつかまえて」

J.D.サリンジャー著

始めに本の内容から。全体的には主人公が体験する事柄を通して、私達読者に何かを感じさせる、そんな小説です。小説の中で彼はある意味でいつも「ひとり」だったような気がします。私達が小説の中で読む彼の心理描写は彼自身から口に出す事は殆どなかったし、彼の事を理解する事が出来た人も少なかったから。

でも小説の中で彼の彼には人に共感されるような、ライトで明るい寂しさ(?)を感じさせる所があって、この小説の魅力の一つになっているような気がします。この小説に関しては色々な受けとり方があると思います。主人公の考え方や価値観を自分とは別個の存在として認め、一種の“問いかけ”のように感じる人もいるかもしれないし逆に、過去や現在の自分を鏡に写し出しているような気持ちになる人もいるかもしれません。どちらにしても、主人公の考え方に比較的共感しやすい学生時代の今(もちろん例外はあると思います)読んで欲しい一冊です。

(法学部1年 米山 陽子)

ヨーロッパ帝国の興亡と謎

湯浅 越男著 日本文芸社 1990

歴史に興味のある人にもない人にもお勧めしたい1冊がこの本。学校で習う歴史はテストでいい点数を取りたいがために丸暗記を強制されるが、このような本を読み歴史に興味を持ってから取り組むとまた違った結果がでてくると思われる。

まず本のタイトルだけを見ると難しそうな本と思われそうだが、全8章のうち、興味のあるところ、どこから読んでもかまわないだろう。特に7章では人物に、8章では国家・都市に焦点をあて、様々なエピソードがわかりやすく書かれている。

1970年頃からの歴史の変動には目まぐるしいものがある。特に最近では一昨年(1989年)のベルリンの壁の崩壊・失般のソ連のクーデター等に見る国際共産党体制の崩壊、また1992年に予定されているECの市場統合等。21世紀の日本、また世界を考える時にこれらの歴史、更にさかのぼって歴史を知ることには有意義なことであるだろう。

ベスト オブ すしーこの一冊で現代の握りのすべてがわかる!ー

握り寿司観察学会編

文藝春秋 1988 596.1 N71

日本人の大好きな食べ物の一つお寿司。

お寿司といっても、散らし寿司、巻き寿司、蒸し寿司などいろいろあるけれどここでいうお寿司とは握り寿司のこと。今や日本だけでなく、外国でも人気を集め、アボガドやスモークサーモンなんていう変り種もあり、かなりインターナショナル的な存在となりつつある握り寿司を日本全国、北から南まで徹底取材しています。全ページカラー写真で、そして実物大で載っているなんてスゴイと思いませんか。なんとなく元気のない時、食欲のない時、この本を開いてみて下さい。読まなくても、写真を見ているだけでいいのです。見ているうちに、心ウキウキ、食欲モリモリになること間違いなしです。

さあ、この本を読み終わったらお寿司屋さんへ Let's Go!

この他にラーメン編、丼(どんぶり)編もあります。

満 月

原田 康子著 新潮社 1988

今、この小説が一番タイムリーなのではないでしょうか。舞台は豊平川。仲秋の満月の夜に、なんと三百年前の侍がタイムスリップして現れる、という話なのですが、別にこのての話は珍しくないとお思いでしょう。しかし某×××と〇ー〇なる評論家に「この小説を読んで泣かない人は、よっぽどの冷血人間よ。」とまで言わせるほどの、やさしく切ない、ラブ浪漫スFファンタジーなのです。「それじゃ映画をみればいいじゃない!」なんて言わないで下さい。この本の中には、原田作品独特の“意気”が小気味よく感じられるのです。(映画は見ませんが……)そしてすっかり感化された私は「やはり十五夜は、きぬかつぎと菊の酢の物、鶏のつくね焼き、そして豆腐とシメジの酢の物よのう!!」なんて言いつつ、豊平川に♪ Mr. Moonlight を探しに行こうかと考えているのです。

◆ 経済関係 ◆

- プロセスとネットワーク 今井賢一編 1988
- 地域投入係数推計方法の有効性 中谷孝久著 1990
- 経済学説と精神史の間 内田忠寿著 1987
- ヒューマン・ベターメントの経済学
K. E. ボールディング編 1989
- マクロ経済学の構図 S. C. ダウ著 1991
- 円が揺れる企業は動く 伊丹敬之著 1990
- 「豊かさ」日本の構造 日刊工業新聞特別取材班編 1989
- 台湾経済調査報告 大東文化大学日本経済研究所編 1990
- ニュービジネス地方宣言 北海道未来総合研究所編 1988
- 我が国の政府開発援助 上, 下 外務省経済協力局編 1989
- ソフト化社会における札幌市の支店企業の活動実態
札幌商工会議所編 1988
- 信用組合の経済学 J. T. クロット著 1990
- スタグフレーション理論の検討 三輪俊和著 1991
- カード化社会の進展に伴うプリペイドカードに対する消費者の意識と利用実態に関する調査報告書 1990
- 金融機関利用に関する意識調査 平成元年度 郵政省郵政研究所編 1990
- 千歳市公営企業史 千歳市ガス水道局編 1990
- 地域指標ハンドブック 一北海道・東北地域の現状一
北海道東北開発公庫開発企画部編 1990
- 「民族と国家」の諸問題 中本信幸著 1991
- 高齢社会展望調査報告書資料 一全体集計と解説一
北海道開発問題研究調査会 [編] 1990
- 高齢社会展望調査報告書 一2020年代の地域社会と道民生活一
北海道開発問題研究調査会 [編] 1990
- 高度情報社会のコミュニケーション 東京大学新聞研究所編 1990
- 求人広告半世紀 リクルート編 1991
- 男女平等に関する情報についての実態調査
東京都生活文化局婦人青年部婦人計画課編 1990
- 社会組織の防災力に関する研究 水野鉄司著 1990
- ME技術革新と経営管理 中央大学企業研究所編 1989

◆ 法律関係 ◆

- 民事訴訟における裁判官の役割 吉野正三郎著 1990
- 西ドイツ民事訴訟法の現在 吉野正三郎著 1990
- 集中講義 民事訴訟法 吉野正三郎著 1990
- 現代民事裁判の課題 10 国家賠償 村重慶一編 1991
- 民事再審の法理 三谷忠之著 1988
- 民事執行における実体法と手続法 竹下守夫著 1990
- 領空侵犯の国際法 城戸正彦著 1990
- 民事実務と証明論 倉田卓次著 1987
- 法テクが会社を伸ばす 坂本昭雄著 1991
- 現代経済法入門 丹宗昭信編 1991
- 90年代消費社会 野村武正著 1991
- セクシュアル・ハラスメント 中下裕子著 1991
- 日の丸・君が代問題とは何か 山住正己著 1988
- 広告規制の課題 内田耕作著 1990
- 日本議会史録 1-6 内田健三編 1990-1991
- 戦略研究の視角 西原正著編 1988
- 国連再生のシナリオ M. ベルトラン著 1991
- 英米法辞典 田中英夫編 1991
- 会社法 龍田節著 1989
- 製造物責任 安田総合研究所編 第2版 1989
- 訴訟促進政策の新展開 木川統一郎著 1987
- 民事訴訟の基礎法理 小島武司著 1988
- 民事実務ノート 1-3 判例タイムズ社 1989
- 民事訴訟法 中村英郎著 1987
- 民事手続の現在問題 中野貞一郎著 1989
- 民事紛争解決手続論 太田勝造著 1990
- 口述民事訴訟法 谷口安平著 1987
- 民事訴訟法 上田徹一郎著 1988
- 民事訴訟法理論 渡邊綱吉著 1987
- 民事訴訟法論集 山木戸克己著 1990

案内

◆工学関係◆

- 松陰と女囚と明治維新 田中彰著 1991
- 政治をみる眼 神島二郎著 1991
- 外交に勝利はない 三宅和助著 1990
- 開国 和田春樹著 1991
- 日米関係の構図 原彬久著 1991
- コーポレート・シテズンシップ 笹川平和財団編 1990
- スウェーデン人はいま幸せか 訓覇法子著 1991
- シュタイナー教育を語る 高橋巖著 1990
- 知識システムハンドブック 小林重信編 1990
- 新しい誤差論 吉澤康和著 1989
- トップクォーク最前線 原康夫著 1991
- 核磁気共鳴イメージ 的崎健著 1991
- 日建設計の歴史 1900-1990
「日建設計の歴史1900-1990」編集室編 1990
- 北海道道路史 1-3 北海道道路史調査会編 1990
- 水処理工学 井出哲夫著 1990
- 日本建築学会百年史(1886-1985) 日本建築学会編 1990
- 日本原始・古代住居の研究 石野博信著 1990
- 世界の集合住宅:20世紀の200 芦原義信監修 1990
- 水性コーティングの最新技術 シーエムシー編集部 [編] 1990
- 超短光パルスレーザー J. Herrmann 著 1991
- 光ディスク 大友義郎著 1990
- テレビジョン画像情報工学ハンドブック
テレビジョン学会編 1990
- 自動プログラミングハンドブック 原田実編著 1989
- カラー液晶ディスプレイ 小林駿介著 1990
- 環境流体輸送 松梨順三郎著 1991
- 地方都市・21世紀への構想 酒田哲著 1991
- 文章をみがく 中村明著 1991
- 日本語の特質 金田一春彦著 1991

◆教養関係◆

- 起源と根源 小林康夫著 1991
- ホワイトヘッド P. G. クンツ著 1991
- 惑星軌道論 G. W. F. ヘーゲル著 1991
- マルクス M. アンリ著 1991
- ナチズムと私の生活 K. レーヴィット著 1990
- 世界としての夢 D. フォン・ウスラー著 1990
- シリーズ世界史への問い 9 世界の構造化
柴田三千雄編 1991
- 旗本の経済学 小松重男著 1991
- 外国新聞に見る日本
国際ニュース事典出版委員会編 1990
- 日本文明史 5 乱世の創造 (村井康彦著) 1991
- アメリカのサムライ F. G. ノートヘルファー著 1991
- 不滅の大国アメリカ J. S. ナイト Jr. 著 1990
- ファッション史探検 飯塚信雄著 1991
- 裸体とはじらいの文化史 H. P. デュル著 1990
- 世界科学・技術史年表 都築洋次郎編著 1991
- 人間学的精神医学 人見一彦著 1991
- 生命倫理と現代社会 加茂直樹著 1991
- 権力のペンタゴン L. マンフォード著 1990
- ろうそく物語 M. ファラデー著 1991
- 中国 名茶紀行 布目潮瀧著 1991
- 日本美 縄文の系譜 宗左近著 1991
- ヨーロッパの日記 1, 2 G. R. ホッケ著 1991
- 近代日本文学の源流 大久保喬樹著 1991
- 文明開化と女性 佐伯順子著 1991
- タブローの解体 水田恭平著 1991
- 夏目漱石と女性 佐々木英昭著 1990
- 失われた時の流れを 倉本聰著 1990
- 中国文学この百年 藤井省三著 1991
- リルケ全集 1 詩集 R. M. リルケ著 1991

夢風人 ③

— ロシア大使
ガリツィン(1720-92)
のみたモーツァルト —

バラライカの調らべ
— モーツァルト・ロシア幻想

ウィーン部外の小高い丘の上にあった私の夏の別荘をモーツァルトはよく訪れた。

まわりには牛がねそべり小鳥たちがさえずっている。20万人余の良きウィーンの時代の田園がそこにはあった。

高いカシの木の下には説教台がありそこで牧夫がバラライカを弾いていた。

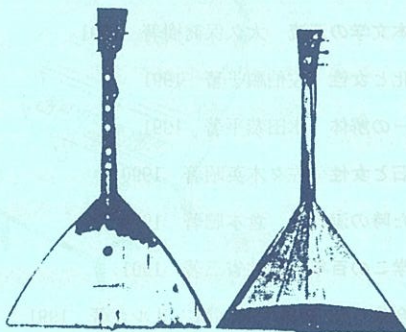
モーツァルトにとってその響きは「もの悲しい民衆の声」と聴こえた。

モーツァルトはよく「父とロシア行きを話しています。そこから中国へもね。」と言った。

これはとうとう実現しなかった。もしモーツァルトがロシアを訪れていたらモーツァルトの音楽はさらに新しい領域を拓らいたことであろう。

ともあれモーツァルトが1784年に作曲した「**弦楽四重奏曲・狩り・K 458**」はロシアの大地を我々に思わせるのに十分だ。

秋の日の一日私たちはバラライカと共にこの曲ののどかさにひたったのだった。



モーツァルト

楽
天
花

— 時
芽
季
の
モ
ー
ツ
ア
ル
ト

③

乙奈草
おとなそう

フルート四重奏曲
K 298

— パリの名ごりの花

モーツァルトのフルートの曲といえば、これまで母を伴ったあの「ロマンティック街道」の旅の途中マンハイムでさる富豪の依頼で作曲した「2曲の協奏曲と3曲の四重奏曲」が知られている。

この「フルート四重奏曲K 298」のみがパリで1778年に作曲されたとされて来た。

ところが最近の研究ではこの曲はモーツァルト30歳、1786年、『フィガロの結婚K 492』や『交響曲プラハK 504』などの名曲が生み出された年に作曲されたとされた。

フランス民謡に題材を得たこの曲はこれから登りつめる高い峰の途中でくつつろいでいるモーツァルトの心の安らぎを感じさせる。

あのパリの母の思い出がモーツァルトの心の中に投影されているといえないだろうか。

このほかにパリ時代の作とされた『トルコ行進曲はピアノソナタK 311』も又ウィーン時代の作である。又「ピアノとヴァイオリンのためのソナタK 360」はフランス民謡「泉のほとりで」による「6つの変奏曲」である。

民衆の牧花

カルダノ讃花

——三次方程式の
使者モーツァルト

啓芽季の
モーツァルト
③

楽
天
知

モーツァルトは彼らバビロニアの書記たちが三次方程式にも立ちむかっているのを見て驚かざるをえなかった。

もっともそれは特殊な数表を用いてのみ解けるものではあったが。

彼らは一般的な形の三次方程式の解法を思い出せなかったことにモーツァルトはむしろほっとした。

モーツァルトは中世にイタリアのカルダノがバビロニアのアイディアである「ピュタゴラスの定理」を用いて三次方程式の解法に見事応用して解いたと告げると幾分悔しさを示しながらも驚いた様子にモーツァルトは満足気であった。

カルダノは

$$x^3 = px + q \text{ ————— (1)}$$

を $x = u + v$ と置き

$$(u + v)^3 = 3uv(u + v) + u^3 + v^3 \text{ ————— (2)}$$

との間に「ピュタゴラスの定理」の関係があるのを発見した。

カルダノこそバビロニアの知恵を継承した数少ない数学者の一人である。

——モーツァルト
忘れ得ぬ
人々より

アマデウス
交遊録

③

スヴィーテン男爵

——図書館長は音楽愛好家——

ウィーン時代の親友の一人に宮廷図書館長スヴィーテン男爵がいた。

彼は音楽愛好家で作曲もたしなみモーツァルトを招いては良く演奏会を自邸で開いた。

ウィーン宮廷とベルリンのフリードリヒ大王との連絡係も務めていたから彼は北ドイツのバッハの音楽に親しみ楽譜を取り寄せていた。

こうしたことでモーツァルトはバッハの音楽にふれる機会を得た。

しかし、モーツァルトが図書館通いの中から得たものは「目録」を作ることであった。

1784年2月9日から書きはじめたモーツァルトの『自作品目録』こそそのあのケツヘルの『モーツァルト全作品目録』(1862年)の礎石となったものである。

その最初の作品こそ『ピアノ協奏曲K 449』ではじまった。最後の曲『クラリネット協奏曲K 622』までの125曲はモーツァルトの「音の宝石目録」といってよい。

スヴィーテン男爵は又、モーツァルトが開いた予約演奏会の最後の二人の一人である。



省エネ考(その三)

小坂直人

技術進歩によってエネルギー消費機器の効率化が促進されることは歓迎すべきであり、実用化が待たれている将来技術は数多い。

しかしながら、それにしても我々は壮大な無駄を前提にエネルギーを消費していることに想いをめぐらせるべきかもしれない。ℓ当たり走行距離を1 kmでも延ばした乗用車が開発されれば、それはそれで偉大な成果を上げたことにはなる。けれども、乗用車そのものが、燃料のエネルギーを移動力としてどれだけ利用できているかという観点からみると、せいぜい10%位のものである事を考えると、その成果はむしろささやかなものである。資本主義の巨大な生産力の始点となったワット蒸気機関の熱効率は6%位と推定されているが、最新鋭の火力発電所でも38%位であり、熱機関の効率は我々が予想しているよりはかなり低いものである。国民経済トータルとしてのエネルギー投入量に対して、実際に利用できる量は約35%とされる。つまり、100 ℓの石油を燃やしても、65 ℓ分のエネルギーは棄てられているということなのである。この部分は「必要悪」としてあえて問題にしないか、あるいは無視してきたのがこれまでの我々の生活であった。これが無視できないものであることを思い知らされたのが「公害」であり「環境問題」である。契機が何であれ、従来棄てられてきたエネルギーに人々の目が向くようになったのは大切な事である。省エネと環境問題は二人三脚のように解決が計られる必要があるが、ここでは廃熱利用という側面から考えてみよう。

近年、燃焼ガスを用いて先ずガスタービンを回して発電を行い、その余熱で蒸気を発生させ、今度は蒸気タービンを回して発電する「複合発電システム」が脚光を浴びている。また、ディーゼルエンジンなどによって発電を行い、その余熱で暖

房や給湯を行う、いわゆる「コ・ジェネレーション」の設置が盛んである。これらは、エネルギーの多段階利用をシステムに組み込んだものであり、従来廃棄されてきたエネルギーを利用する点に特色がある。したがって、新たなエネルギーを投入しないで済む分だけ省エネ的である。「コ・ジェネレーション」は、このように合理的な考え方に基づいており、我々に大いに期待をいだかせるものだが、その普及はまだまだである。その背景は以下の点にある。

第一に、「コ・ジェネレーション」は熱と電力に対する需要がある程度まとまって存在することを前提とすること。具体的には、工場、病院、ホテル、学校などに適しているということ。第二に、従来、熱はガス及び石油会社、電気は電力会社というようにエネルギー供給システムが別系統で考えられてきたため、これを結びつける考え方がまだ希薄であること。第三に、したがって、「コ・ジェネレーション」で生じた余剰電力を電力会社が引き取るかどうかという問題になると、垣根の問題が制度的にも障害となったということ。

現在、これらの障害は徐々に克服されてきており、「コ・ジェネレーション」の一層の発展の基礎ができ始めているといえよう。しかも、電力会社以外の発電を専門としない企業からの買電については、たとえば製鉄所の余剰電力を電力会社が購入するという形での経験があり、規模の大小、電気の質など技術的な課題を含め、大いに参考にされるべきであろう。「コ・ジェネレーション」は、エネルギーの供給が今やエネルギー源の違いや個別企業の枠組をこえた、トータルシステムとして考えられるべき段階に入りつつある事を教えているように思われる。

(こさか なおと 経済学部教授)

北海学園大学附属図書館報 図書館だより Vol.13 No.3.(通巻119号)

本館 〒062 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号 工学部分室 〒064 札幌市中央区南26条西11丁目
☎(011)841-1161 本館内線 270~275・279 工学部内線 813・814